

くらしかた・すまいかた  
まちづくり編 Vol.5

## 都市森林プロジェクト

1本の街の木からはじまる物語

「都市に緑を」という言葉や活動は多々あれど、植えた1本1本の「その後」について、植える時から考えている人は少ないものです。

今回は、「木があつてよかった」を最大化する取り組み「都市森林プロジェクト」を展開している

街の木ものづくりネットワークに活動の原点とこれまで、そしてこれからの展望について、お話を伺いました。

取材・編集：(株)地球工作所 Earth Planning & Work,inc  
取材協力：一般社団法人 街の木ものづくりネットワーク 理事 横山恵さん  
図版提供：一般社団法人 街の木ものづくりネットワーク、都市森林株式会社

### 街の木を活かしたい

編集部：「街の木ものづくりネットワーク（以下、「マチモノ」）の活動が、こういった形で始まったのか教えてください。

横山さん：そもそもは、マチモノの代表理事である湧口善之さんが持っていた「都市森林プロジェクト（P3参照）」のアイデア・構想から始まった活動で、「木があつてよかった」を最大化する取組みで、都市にある木を「都市森林」として位置づけ、この森に新たな循環を創ることを目指しています。湧口さんは自身の木工や建築的な仕事を通じて実践されていました。一方で仕事として木に関わるばかりではなく、一般の人たちにもこの活動を広めたい、という展望も生まれ、マチモノの前身となる市民活動的な、非営利の活動も始まっていました。私はそんな黎明期に湧口さんと知り合い、市民活動的な活動をお手伝いすることになりました。会の設立当初は世田谷区のとあるお寺の境内を借りて、切った木材を使ったスプーンづくりを主としたワークショップの傍ら、カフェの運営を行っていました。

編集部：ワークショップはどんな方が参加されていたのですか。  
横山さん：木工好きな女の人が多かったですね。あとは子供連れの家族が中心でした。スプーンづくりは楽しいんですが、活動の幅が広がらないことが当時の悩みでした。活動を続けていく中で、製材ワークショップ誕生のきっかけにもなった「世田谷のクロマツ」についての相談がきたのです。

### 世田谷のクロマツ

編集部：それはどんな内容だったのでしょうか。  
横山さん：都市計画道路の拡充範囲にある大きなクロマツが切られてしまうので、その材を活かして何かできないか。」という相

談でした。相談者は共通の知人を通じてマチモノの「街の木を活かす」という活動に理解を示して下さっていた方でした。相談を受けて私が現場に駆けつけたところ、伐採工事はすでに進んでおり、その木は街路樹だったので、まずは管理者である世田谷区へ相談に行きました。

編集部：街路樹ということは、相談されてきた方は木の所有者ではないのですか。

横山さん：近所にお住まいの方でした。結局、世田谷区に「切った木を木材として、地域の方々と一緒に活かす取り組みをしたい。」と相談したところ、材を活用する許可をいただけて、その相談者さんのご厚意で、ご自宅の庭に切った丸太を置かせてもらうことができたため、製材ワークショップの募集をかけたのです。

編集部：その時はこういった形で告知を行ったのでしょうか。  
横山さん：マチモノのFacebookや個人のSNSを通じて告知しました。急な呼びかけになってしまいましたが、マチモノの活動を興味深く見守ってくれていた人が多かったようで、その場所にゆかりのない人もたくさん参加してくれました。

### 製材ワークショップのはじまり

編集部：製材ワークショップの第1号とのことですが、どのように進められたのでしょうか。

横山さん：樹皮を剥く作業から始めました。専用の道具やノミなどを使って向いていくんですが、特に子供たちが夢中になっていましたね。

丸太を回して、少しずつ皮を剥いていく時に木の重さを感じたり、樹皮を剥いだ後のむき出しの表面を触ると湿っていることがわかります。参加してくれた人たちが直に木に触って見て、初めて「木が生きていた」ことを感じられる。



木の皮を剥ぐだけでなく、切った木で木工をしたりと盛りだくさんのメニューを用意していたんですが、切った木をその日に加工するのは難しい、ということをごここで学びました。さらにこれが以降の製材ワークショップへ繋がっていきました。

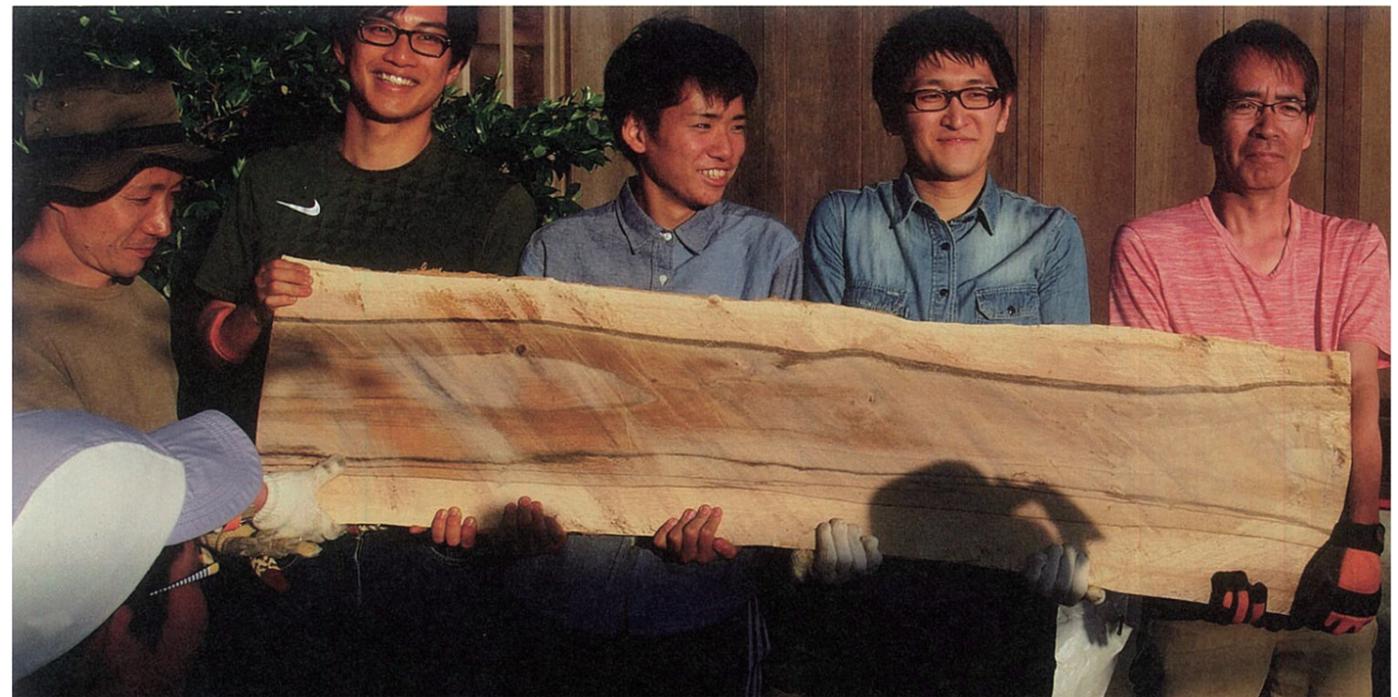
### 木と向き合う一時を共にする

横山さん：その後、300年続いた屋敷林のシラカシ、杉並区の保育園のサクラ、神奈川県大和市の緑地のウワミズザクラ、長く邸宅と共に暮してきたケヤキなど、様々な場面で製材ワークショップを開催させていただきました。

編集部：製材ワークショップの良さというのは、どんなところでしょうか。

横山さん：思い入れのある木に対してお別れを言う機会になっているところでしょうか。今って色んな儀式が簡略化されて、時間を短縮したり、手間を省略することが「効率的」で良いこととみなされがちですが、一度立ち止まって物事に向き合い、今までの思い出とちゃんとお別れすることで次に進めることってあると思うんです。製材ワークショップはそんな1本の木とのお別れをする場になっていると思います。解体されるお宅が製材ワークショップを行った時には、工務店の二代目の方がいらして、家の誕生とお別れの両方に世代をまたいで立ち会えることに感激されていました。

ワークショップの中では、剥いた樹皮を活用して草木染めも行いました。樹種により、自然の発する色の違いに参加者さんと共に発見を楽しみました。こんな風に木を持つ魅力や楽しみを参加者



の皆さんと一緒に体験できることも、製材ワークショップの良さだと感じています。

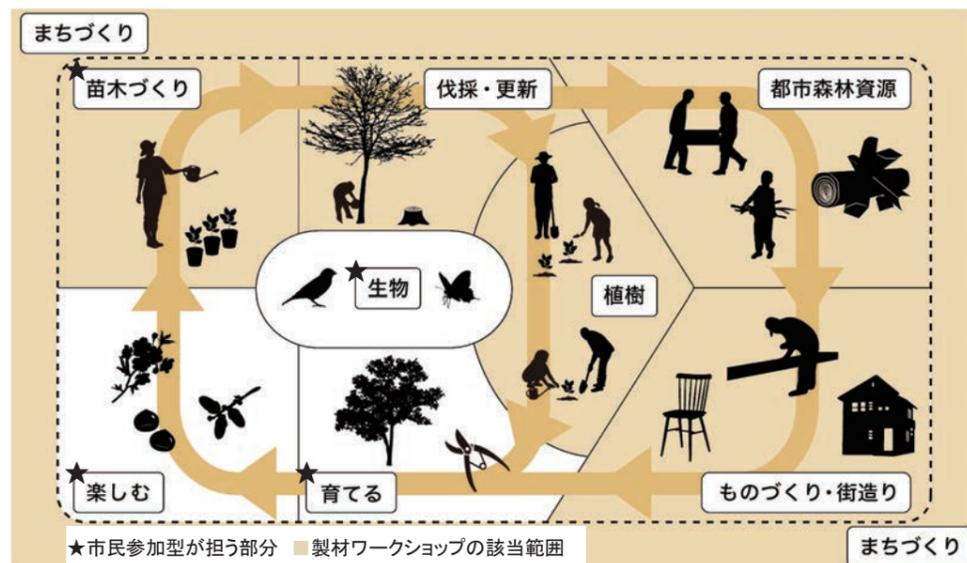
2回の製材ワークショップを開催した後、色んな人から声をかけられるようになりました。でもそれは必ずしもポジティブなものではなく、私たちが街中で切られてしまう木を、材として求めていると勘違いされることも増えました。誤解がないようにお伝えしたいのですが、私たちは街の木を活かして、人と木のつながりを様々な形で展開したくて活動している団体です。製材ワークショップは確かに私たちの主軸を担う活動ですが、その他にも植物観察会をしたり、街中に残された緑地で種を拾って苗を育てたり、幅広い活動を行っています。

編集部：マチモノの活動で生まれた木材は、ワークショップ後にはどのように活用しているんですか。

横山さん：都市森林株式会社が家具や内装材として加工して使っています。湘南平のリトルツリー等、街の木が街へ戻っていく活動も行っています。街の木を循環させるためには、木の伐採、乾燥、運搬や木材加工など、プロの協力が欠かせません。そこで都市森林株式会社を設立し、マチモノと都市森林株式会社、2つの組織が連携することで、今まで街の木を活用しようとする時の課題となっていた様々な業種や活動を横断し、繋がられるようになったのです。

### 二つの組織が担う役割

編集部：二つの団体はどのように役割分担されているのですか。  
横山さん：簡単に言うと市民向けの活動はマチモノが担当し、プ

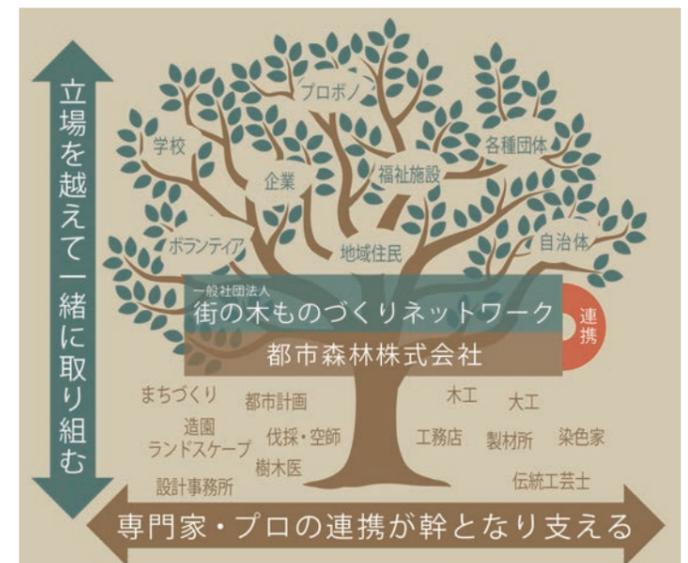


### 都市森林の循環

都市森林プロジェクトでは、毎年の剪定で出る枝葉や木の実など、普段から街の木の恵みを頂いて楽しめます。伐採された木は木材にして、暮らしの道具や家具を作ります。造っては壊しての繰り返しで継続しなかった街並の中に、人々の想いが詰まった木々を集めて、建物も造ります。木材になる木々から苗木を育て、都市森林を育てます。先達が植えてくれた木々で街を造り、自分が植える木や子供たちが植える木で、街をつくっていくのです。世代を超えて受け継がれる街並みと、木をきっかけに人々が出会い、共に楽しみ、学び、汗を流し、なにかに取組む光景が当たり前にある街をつくりたいのです。(製材ワークショップ・都市森林プロジェクトより)

### 専門や職域、立場を超えた連携を

まちづくりと街造り、都市緑化に一体的に取組む「都市森林プロジェクト」では、幅広い専門家や業者の連携が必要です。また、街の木に仕事として関わるわけではない、地域住民をはじめとした方々の力も必要です。そこで、プロとしての責任とクオリティを担保しながら、様々な業者を束ねてプロジェクトをドライブする会社法人と、誰もが取組みに参加できる場としての非営利法人という、ふたつの担い手をつくり、都市森林の未来をトータルで考え、実践できる形をつくりました。(都市森林 Project パンフレットより)





口でないといけない部分は新会社が担当しています。具体的に言うと難しい場所の木の伐採や運搬、街の木を使った家具製作や施設設計等です。2つの組織が密に協力しあうことで、行政や企業に向けた活動も展開することができました。

編集部：最近の活動をご紹介いただけますか。

横山さん：最近では、南町田駅前にできた鶴舞公園の活動があります。これは「南町田拠点創出プロジェクト」として、駅前のショッピングモールと公園の一体的な再開発をテーマに行われました。新会社の都市森林株式会社から委託を受けて、この中の市民向けの活動をマチモノが担当しました。

製材ワークショップだけでなく、工事中の公園に市民が入って苗木採りをしたり、公園脇に新設される市民向け施設の内壁に木レンガを張るワークショップを開催したり、市民が自身で公園について考えて作る活動のお手伝いをさせていただきました。木レンガ貼りのワークショップでは150人もの方が参加してくれて、大盛況でした。

編集部：活動の場所は限定されていないのですか。

横山さん：活動拠点があればできることもあります。私たちは活動拠点を持っていないので、地域に限定されない活動が可能になっています。東京や神奈川など、地域を限定しない形で活動できています。



## みんながワクワクする活動を

編集部：今後マチモノとしてどんなことをしていきたいですか。

横山さん：基本的には自分たちがワクワクしながらできる活動を行ってきたので、そこは意識して続けていきたいです。

例えば、毎年12月に行っている「都市森林の収穫祭」は、木の実やドングリ、葉や花、木材から得られる燻製チップ等、食材としての木の恵みを活かすイベントです。

皆で集めてきた都市森林の恵みにアイデアと創造力が掛け合わされて、毎回素晴らしい料理が生まれます。それだけでなく、料理台や食器やテーブルクロス等、会場のしつらえにも都市森林の恵みが活かされます。皆で集まって楽しむ会なので、これからも試行錯誤しながら続けていきたいですね。

何をやるにしても、もてなす側ともてなされる側を作りたいので、参加者が主体的に参加しながら、皆で作る形の活動を展開していきたいです。

木が暮らしの中にあると、生活がもっと楽しくなるということを体験することが、木と人の暮らしを近づけるために大切なことだと思います。

編集部：今日は貴重なお話をありがとうございました。(終)

都市森林 Project  
一般社団法人 街の木ものづくりネットワーク

<https://www.toshiringyou.com/>

街の木を活かす

## 都市森林 Project

庭木、街路樹、公園木。これまで眺めるだけだった街の木に「活かす」という視点を取り入れて、その魅力と価値を最大化する。木があって良かった！の先に、街の木＝都市森林の新しい循環が生まれようとしています。

### 植樹・育樹 苗木をつくる



大きな木や広い緑地の伐採は、私たちの街のどこかで毎日のように行われています。植樹プロジェクトでは、工事の関係者や地域の人と一緒に、伐採予定の木が落とした種から芽生えた幼木を探して救出したり、種を採ったり挿し木で苗木を作り、育てます。



### 知る・学ぶ 樹木カルテをつくる



木の恵みを生かして「木があって楽しい」を退園すると、もっと知りたい、学びたいという気持ちが湧いてきます。樹木観察会を通して作る樹木カルテには、図鑑的な木の情報だけではなく、様々な活用方法や生物とのかかわり、育成や管理についてなど、あらゆることが書き込めるようになっています。



### 伐採・活用 製材ワークショップ



街で切られた大木を皆の力で製材し、未来に活かせる木材を作ります。街の木が伐られて見慣れた景色が変わるとき、その木の下に人が集まり、力を合わせる。木が伐られても、木があったおかげで人が繋がり、また新しい物語が始まり、街は続いていくのです。



### 集う・楽しむ 都市森林の収穫祭



木の実やどんぐり、葉や花、木材から得られる燻製チップ等、「都市森林の収穫祭」は食材としての木の恵みを活かすイベントです。皆で集めてきた都市森林の恵みにアイデアと創造力が掛け合わされて、毎回素晴らしい素晴らしいお料理が作られます。

